

「俳句を味わう」ための授業づくり —「言葉のレンズ」で俳句の世界を覗く—

沖縄県那覇市立教育研究所 上江洲 朝男

はじめに

いくたびも雪の深さを尋ねけり(正岡子規)
の句を自分なりに読み取らせ、グループ内で発表し合う活動をしてきたときのことである。ある男生徒が次のように述べた。

目の不自由な人が雪の降る音とか匂いとか、肌で感じる冷たさとかで大雪だなと感じて、家族にどれだけ降っているのかと何度も尋ねている感じがした。

発表を聞いてグループ内から感嘆の声が上がる。同時に、一人の女生徒が発言した。

「正解は、作者は病気で起きられないから、看病していた妹に『雪はどれくらい積もっているのか』って何度も尋ねている歌だね。」
グループの皆はシンとしてしまった……。

「俳句を味わう」とは一体どういうことなのか。この疑問が授業実践の出発点である。

一 「寄り添う鑑賞」と「引き寄せる鑑賞」

作者について知り、時代背景について知った上で作品を読み味わうことも大切な「読み」である。しかし、作品そのものを今の自分なりに読み取り、味わっていくことも大切なのではない。そこで、「俳句を味わう」ために、次の二つの方法を考えた。「寄り添う鑑賞」と「引き寄せる鑑賞」である。

「寄り添う鑑賞」とは、作者の生きていた時代や置かれていた状況などを知り、その思いに寄り添って鑑賞する方法である。一方、「引き寄せる鑑賞」とは、作品にある言葉そのものを自分自身の生活やこれまでの体験に引き寄せて作品世界を鑑賞する方法である。

二 「言葉のレンズ」で俳句の世界を覗く

「引き寄せる鑑賞」で俳句を味わうために、

「言葉のレンズ」を通して俳句の世界を覗く。すなわち、句には用いられていない「言葉」をレンズに見立て、向こう側に立ち現れてきた俳句の世界を味わうということである。具体例を生徒が書いた文章を用いて示す。

春風や闘志抱きて丘に立つ(高浜虚子)

この句は子規の興した伝統俳句を守るために奔走していた虚子が新傾向俳句の河東碧梧桐に対して「闘志」を抱いて俳壇に復帰するという決意を歌ったものだ。しかし、生徒にとっては俳壇の世界自体なじみが薄い。そこで、作品そのものを「言葉のレンズ」を用いて味わわせることにした。

生徒の挙げた「言葉のレンズ」は、「新入社員」「ボクサー」「中学三年生」など多様であった。「ボクサー」なら「丘」は「リング」に、「新入社員」なら、「社会」や「職場」になる。

「入学式」としたHさんは、

春風のあたたかい感じと共に入学の季節がやってきて、何事にも頑張るぞ！という気持ちで学校の校門に立った。

と表現した。

また、「決意」としたSさんは、

作者は何かを決意した。丘の上に立ち、春風にかかれながら、決意を固めた。春風が作者を上げまし、応援しているようだった。

と書いていた。

をりとりてはらりとおもきすすきかな（飯田蛇笏）の句を「命」という「言葉のレンズ」で鑑賞したK君は、

つい折って見たものの、そのすすきの重さに命を感じて心まで重くなった。

と述べ、グループでは拍手が起こった。

三 十七音からのシヨートストーリー

次に、「十七音からのシヨートストーリー」と題して、「言葉のレンズ」で見えてきた俳

句の世界を、短い物語にして書く活動を行った。

活動の流れは、「①好きな俳句を選ぶ。②舞台設定、背景の概要を「5W1H」を用いて短文でまとめる。③それをふくらませ文章化する。」とした。

M君は資料集から「こんなよい月を一人で見てる（尾崎放哉）」を選び、「子供」という「言葉のレンズ」で次のようなシヨートストーリーを書いた。

一人でビールを飲み終えて、明日から始まる新しい週に備えて、いつもより一時間早い十時に寝ることにした。狭い部屋を暗くして布団に向かうと可愛い一人娘と大学で出会った同い年の妻が布団を共存して寝ている。

暑いと言って二人が開けた四階の窓からは程よい風が入ってくる。風といっしょに入ってきた月の光は子供の寝顔を黄色く温かく照らしてくれる。

こんなよい月を一人で見てる

ポイントを選んだ俳句で文章を結ぶということである。後に学ぶ『おくのほそ道』へのつながりを意識してのことである。

四 シヨートストーリーから俳句創作へ

最後に逆のアプローチで俳句創作にも取り組ませた。シヨートストーリーを先に書いて、そこから言葉を削ぎ落とし、俳句を創作する活動である。その際、「より伝わる表現はないか」という視点で、創作した最初の句を、グループで意見交換し、四回練り直させた。紙面の都合上、完成させた三句を挙げておく。

○月桃グットウの匂い忘れる沖繩人

○台風ウツクに牙むき挑む大シーサー

○「枯れたい」と密かに思ふ造花かな

おわりに

生活の中で出会った俳句を鑑賞しようとすると大人はどれ位いるのだろう。作品の背景は知らずとも、俳句の世界を自分なりに味わい楽しむ大人になって欲しい。そんな願いに突き動かされて試みた実践であった。

うえす あさお 那覇市立教育研究所指導主事。「中学校国語科における方言に関する授業研究」(雑誌「ことばと教育」)の執筆。演劇集団「創造」代表。